

こちら大阪ねこ神社
神様の使いはじめます

望月くらげ Mochizuki Kurage



アルファポリス文庫

目次

第一願	神様、どうか雨が降りますように	5
第二願	キミが笑っていられますように	99
第三願	いつまでも一緒にいられますように	144
第四願	大切な場所がなくなりませんように	207

第一願 神様、どうか雨が降りますように

大阪府こなもん市しにあるかつおぶし天満宮てんまんぐうの本殿ほんでん、そのさらに奥おくに、猫神社ねこじんじゃと呼ばれる小さな奥宮おくみやがある。

そこには神の使者しんし——神使しんしとして働く猫宮司ねこぐうじがいるという。

その神社で心から願えば、どんな願いでも猫宮司が叶えてくれるらしい。

そう、たとえば……死んでしまった人にすら会わせてくれるのだと——



はあはあと息を切らしながら、虹林香澄にじばやし かすみはかつおぶし天満宮へと続く石段を上っていく。死んでしまった祖母にもう一度会ったために。自分たちの店を守るために。

「本当に、あった」

本殿横を通り抜け奥へと進むと、そこには『守護天神』と書かれた小さな宮と、そして一匹の猫の姿があった。その猫こそ、神の使い、猫宮司だった。



大阪府こなもん市のJ R こなもん駅以北に位置する、ほほえみ商店街の中にある喫茶レインボウ。そこが香澄の職場であり、五歳から育った家だった。

その日、香澄は朝からレインボウで出す新作メニューを考えていた。

夕方、店を閉め、晩ご飯を食べたあと、香澄は喫茶店の二階にある自宅のキッチンにいた。トーストに何を挟むのが一番いいか、先程から作り続けているのだ。

毎日来てくれる商店街の人たちから「何か変わり種が欲しい」と言われたからだ。

変わり種といっても不味い物が食べたいとか珍味が欲しいとか、そういうことではないのを香澄はわかっていて。ただみんな少しだけ、この変わらない日常に刺激が欲しいのだ。

喫茶レインボウは今流行りのカフェではなく、昔ながらの喫茶店だ。香澄の祖母である弥生が、今は亡き香澄の祖父とともに若い頃に始めた。

あの頃は活気があったと、弥生や商店街の他の店主たちが集まるたびに言っているのを聞きながら、香澄は育った。

両親を五歳のときに亡くした香澄にとって、弥生や商店街の人たちが家族のようなものだった。香澄が物心つく前に亡くなってしまった祖父も、随分と香澄を可愛がっていた。その様子は今も写真に残されている。

小さく切った食パンにブルーベリーと苺ジャムをダブルで載せると、香澄はそれを口に放り込んだ。苺とブルーベリーの甘酸っぱさがマッチして意外と美味しいのだけれど、いかにせん口の中が甘すぎる。

これを店のメニューに加えると、健康診断で引つかかる人を増やしてしまいうさだ。やはり健康志向の方がいいだろうか。

香澄はそんなことを考えながら、ふう、とため息を吐くと、窓ガラスに映る自分の顔を見た。

丸顔の香澄はいつまでも年齢より幼く見られる。けれどそんな香澄ももう二十五

歳だ。

まだ若いけれど、十代の頃よりは確実に老けた気がする。学生のとくに頭髮検査でよく引っかけた薄茶色の髪は、いつの間にか肩よりも長くなっている。そういうえば最近、美容院に行っていないな。

そんなことを思いながら、香澄はもう一口トーストを嚙る。今度は林檎のコンポートを食パンに載せてみた。先程よりは甘さが控えていい感じだ。

「あと二つ作ったんだけど、うーん」

一口サイズとはいえ、夕飯後にいくつも食べるのは苦しい。

そろそろ自分で味見するのが限界になり、リビングにいる弥生にも食べてもらおうと、香澄は声をかけた。

「おばあちゃん、海苔トーストと餡トーストどっちがいいか食べてみてー」

随分と大阪に馴染んだものの、どうしても両親と暮らしていたときの言葉やイントネーションが抜けない。

小学生の頃は随分からかわれたけれど、弥生は「そんなん気にせんでええ。どんな風に喋っても、香澄は香澄やさかい」と優しく言ってくれた。

だから、香澄は恥じることなく生まれ育った街の言葉で今も話している。

香澄がお皿にトーストを載せながら「私なら海苔、いやでもここは甘い方が」なんて呟いても、一向に弥生がキツチンに来る心配がない。

テレビを見ているのか、ニュースキャスターの声だけがやけに響いている。

「おばあちゃん……？ 寝ちゃったの？」

弥生は最近リビングで寝てしまうことがよくある。年のせいだけじゃなく、疲れているせいもあるのだろうと、香澄は申し訳なくなった。

いくら元気だからといっても弥生ももう七十一だ。とっくに隠居していても不思議ではないのに、弥生はまだ喫茶店で働いていた。

本人がまだまだいけると言う上に、この辺りの商店街では七十どころか八十や九十になっても現役で働いている人もいる。

この間も弥生は、「またまた若いやろ」と金物屋の澤に言われていた。そんな澤はつい先日の誕生日で九十歳になったというから驚きだ。

二十五歳の香澄が、まるで赤子のような扱いをされるのも仕方ないのかもしれない。それでも、ここ数日は疲れが出ていようやうで、弥生は早めに休んだり、こうやって

テレビを見ながら寝たりしてしまうことが増えた。
今は毎日店に出ているけれど、週に何日か休んでもらう日を作ってもいいのかもしれない。

香澄がそんなことを考えながらリビングに向かうと、予想通り、テレビの前でうたた寝をしている弥生の姿があった。

「おばあちゃん、そんなところで寝てると風邪引くよ」

身体を揺すつてみるけれど反応がない。それどころか弥生は身動き一つしなかった。嫌な予感に香澄は背筋が冷たくなるのを感じた。

「おばあちゃん！ ねえ、おばあちゃんってば」

どれだけ声をかけても反応のない弥生に、香澄は頭の中が真っ白になっていく。

そしてようやく絞り出すように声を出した。

「きゅう、きゅ、うしや……」

震える指でスマホを操作する。スワイプ一つするのも上手く指が動かず、何度も失敗してしまふ。

「ああっ、もう」

何度目かのタップでようやく電話は繋がった。

『はい、119番です。火事ですか？ 救急ですか？』

「あ、あのっ、救急で……おばあちゃんが……」

声が震えて上手く話せない。喉の奥がつかえたようになって、伝えたいことが溢れてくるのに、言葉が出ない。

「う、動かなくて……倒れてて……」

『大丈夫です。ゆっくりでいいですよ。今どちらにいらっしゃいますか？』

「こ……こなもん市の青のり町三丁目、二番地の家です！ あ、おばあちゃんが……」

『わかりました。救急車を向かわせます。ご安心ください』

「で、でも！ おばあちゃんが」

『呼吸はしていますか？ 意識はありますか？』

混乱する香澄を落ち着かせるように、オペレーターは柔らかな口調で問いかける。香澄はカタカタと震えながら、恐る恐る弥生の頬に触れた。

その頬はひんやりしていて、思わず手を引つ込めそうになる。

けれど――

「あつ……」

……かすかに、あたたかい息が香澄の手に触れた気がした。

香澄は小さく震える指先を、そっと弥生の鼻先へ近づけた。

「目、開けないけど……息はしています……」

『ありがとうございます。そのままそばにいてあげてください。救急隊がすぐに向かいます』

オペレーターの静かで優しい言葉に少しだけ安心する。

「……はいっ……」

溢れてくる涙と嗚咽おえつを堪えながら、香澄は震える手で弥生の手を握りしめた。

香澄はその場にへたり込む。壁にかけた時計の針の音が、妙に大きく聞こえた気がした。

――どれぐらいの時間が経っただろう。

遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。窓ガラスに赤いランプが映っているのが見えて、香澄は慌てて一階へと駆け下り、ドアを開けた。

「こっちはです」

香澄の案内で、救急隊員は手早く弥生を救急車に乗せた。

「おばあちゃん」

香澄が呼びかけると、弥生は小さく身体を震わせ、薄らと目を開けた。

その手を香澄はギュッと握りしめる。ほんの少しだけ弥生の口が動いた。

「何？ おばあちゃん、何が言いたいのか？」

「か、す……み……あ……」

「おばあちゃんっ」

弥生は何かを言いかけたけれど、香澄はそれを上手く聞き取れないまま、再び弥生の目は閉じられた。

――そして二度と開くことはなかった。

そのあとのことを香澄はよく覚えていない。心配した商店街の人たちが病院に駆けつけてくれて、弥生の通夜つやや葬式そうしきの手配をしてくれた。

香澄はただ呆然としたままだくさんの人からかけられる「可哀想かわいそうに」という言葉を聞き続けていた。



ふと気づくと朝だった。昨夜、カーテンを閉め忘れたのか、部屋に入ってくる光が眩しくて香澄は目を細める。

そうだ、レインボウの開店準備をしなければ。香澄は妙に重い身体を引きずるようにして一階に下りた。いつものように店の窓を開け、空気を入れ換える。店内が妙に埃っぽいのはどうしてだろう。昨日もちゃんと掃除をしたはずなのに。

「昨日？」

それは本当に？ わからない。上手く思い出せない。でも、そんなことどうでもいい。

香澄はドアを開け『オープン』と書かれた札をかけると、キッチンに向かった。

モーニングの準備をしようと冷蔵庫を開ける。けれど、中は空っぽで機械音だけが響いていた。

「どうして……？」

レインボウで出している料理の材料は、全て地元のお店で仕入れている。

仕入れているといえば格好がいいけれど、実際は前日の夕方に香澄が買い出しに行っているのだ。

なので、昨日もいつも通り夕方には買い物に行ったはずだ。

それで、確か――

「……あれ？」

昨日買ってきたものを思い出そうとするのに、いくら考えても思い出せない。

行っただよね？ ううん、今はそれよりも。

これでは今日は店を開けることができない。いや、今から買いに行けば間に合うかもしれない。

冷蔵庫を閉める香澄の耳に、ドアベルの音が聞こえた。

「いらっしやいませ。すみません、今――」

「香澄ちゃん、何してんねん」

そこにはほほえみ商店街でカレー屋を営む雲井とその妻である亜矢の姿があった。

二人はエコバッグを持っていて、中には何かが入っているようだった。

慌てたように入ってくる二人に、香澄は笑顔を作る。

「あ、雲井さんに垂矢さん。おはようございます。ちょっと待ってくださいね。私、昨日買い物忘れちゃったみたいで冷蔵庫空っぽなんです。だから、今から行ってくるんで」

「買い物って……昨日はそれどころとちゃうかったやろ」

「え、あ……」

瞬間、香澄の脳裏に昨日の、そして弥生が倒れていたときの光景が鮮明によみがえる。昨日は弥生のお葬式。買い物になんて行けるはずがない。

店内が埃っぽいのも、弥生が死んだ日からそのままになっていたから――

「おばあちゃん……」

どんなに香澄がいつも通り振る舞っても、もう弥生はどこにもいない。

昨日、雲井をはじめとした商店街の人たちと一緒に弥生を見送ったのだ。もう二度と会えない。

「……昨日は、ありがとうございました」

深々と頭を下げる香澄を見て、雲井は「香澄ちゃん」と静かに名前を呼んだ。

「そないなこと言うてほしいんとちゃう。なんで店開けようとしてるんやって聞いてんねん。弥生さんが亡くなったいうのに」

雲井の言葉に、香澄はなんとか笑顔を浮かべようとして、けれどどうしても笑えなくて、結局、苦笑いを浮かべることしかできなかった。

「おばあちゃんが死んだからってお店閉めてたら、怒られちゃいます」

「そんなわけないやろ。ええからとにかくここ座り。朝はなんか食べたんか？」

雲井は香澄の肩を掴むと、カウンターの椅子に座らせた。

香澄を挟むように雲井たちが横の椅子に座る。

「朝ご飯、ですか？ えっと」

雲井の言葉を聞いて、香澄はそういえば朝食を食べていないことに気がついた。

いや、朝食だけじゃない。昨日の夕食も、その前も――

黙ってしまった香澄に、雲井は眉をひそめた。

「まさかと思うけど、あの日から食べてへんいうこと、ないやろな？」

雲井の言うあの日が、三日前、弥生が死んだ日を指していることは明白だった。

香澄は誤魔化すように笑ってみせるけれど、そんな香澄に二人はため息を吐いた。

「なんか食べたいもんあるか？ 色々買^ようてきたし、遠慮せんと言うてや」
雲井はエコバッグを開けると、おにぎりやお粥^{かゆ}のレトルトパックが入っているのを見せてくれる。けれど香澄は首を横に振った。

「お腹、空いてなくて」

嘘ではなかった。空腹を感じないのだ。

不思議な感覚だった。別に具合が悪いわけではない。食欲がない、という感じとも違う。ただお腹が空いていない。それだけだった。

けれどそんな香澄に雲井は小さく首を横に振った。

「……香澄ちゃん、それはな空いてないんやなくて食べられへんねや」

「え？」

「大丈夫、元気やつて顔してるけどな、ほんまは全然大丈夫と違うんちゃうか？ 無理、せんでもええんやで」

そんなことないです、と否定したかった。大丈夫です、一人でも頑張れますと言いかかった。

けれど、口を開いても喉の奥が締まったように苦しくて、上手く言葉が出てこない。

それどころか、気づけば香澄の頬を涙が伝っていた。

「どう、して……」

どうしてこんな心配してくれるのだろう。同じ商店街に住んでいるとはいえ、赤の他人だ。なのに、どうして。

香澄の問いかけに、雲井は優しく微笑んだ。

「弥生さんから頼まれてたんや。自分に何かあつたら香澄ちゃんのことを頼むつてな」
「おばあちゃんが」

「そうや」

弥生の名前を聞いて、香澄の胸の奥がきゅつと締め付けられる。そんなこと思いましなかった。

涙を拭うことも忘れて呆然とする香澄の頬に、亜矢がそつとハンドタオルを当てた。

「みんな、心配してんねんで。澤さんも田^た神^{かみ}さんも、他にもみんな、香澄ちゃんのことを心配してんねん」

「ごめ、な……さ、い……」

「謝らんでええんよ。そうやないの。私たちはね、みんな香澄ちゃんに頼つてほしい

ねん。一人じゃないんや。みんながついてるんやで」

亜矢は香澄の手をギョツと握りしめた。その手のぬくもりがあまりにも優しく、香澄は涙が止まらなくなる。

一人じゃないのだと、そう思えただけで、真つ暗だった世界にほんの少しだけど色がついたようなそんな気がした。

ありがとうと伝えたいのに、口をついて出るのは嗚咽ばかりで上手く言葉が出てこない。そんな香澄の背中を、亜矢は優しく撫で続けた。

その日、香澄は三日ぶりに食事をとった。

おにぎりはどうしても胃が受け付けなかったのでレトルトのお粥を温めた。具も何も入っていないただのお粥のはずなのに、涙が溢れるほど美味しかった。

自分は生きているんだと改めて思わされる。

「頑張ろう」

香澄は小さく呟いた。

弥生がいなくなっただとしても、香澄は生きていかなければいけないのだ。悲しくても辛くても、弥生が育ててくれた命を大事にしなければいけない。それが今の香澄に

できる唯一の恩返しだった。

そう決めてからの香澄の変化は早かった。



翌日は弥生が生きていたときと同じように、香澄は六時には起きて朝ご飯を作った。一人で食べる朝ご飯は切なかつたけれど、それでも顔を上げて最後まで食べきった。

そのあと『明日から営業を再開します』と書いた紙を扉に貼り、それからレインボウの掃除をした。四日間放置された店内は、埃が溜まっていたり窓が汚れていたりした。香澄は机を一つ一つ拭いて床を掃く。弥生が残してくれたレインボウを自分が受け継ぎ、守っていくのだと噛みしめながら。

四日ぶりにレインボウの扉を開けて掃除をしていると、商店街の人たちが代わる代わる顔を出してくれた。

弥生が生きていた頃と同じように笑顔が溢れる店内に、自然と香澄の表情も緩む。

「私、頑張るから」

——だから、見ててね。おばあちゃん。
 キッチンに置いた弥生の写真に向かって香澄は小さく、けれど寂しげな笑みを浮かべた。

何も出せる物はないけれどとりあえず、と香澄がコーヒーを淹いれていると、誰かが店内に入ってくる気配がした。

また商店街の人だろうか、そう思いながら香澄が顔を上げると、そこには見覚えのない男性が立っていた。

「あ、すみません。今日はやってないんです。明日から再開しますので、よければ——」

香澄の声を無視して、その男性は店内を見回し、肩をすくめた。

いったいなんなのだろう。そう思いながら、香澄は男性を見る。

黒のジャケットにグレーのTシャツを着て、黒のスラックスを穿はいたその人は、店内をあちこち歩き回っている。

談笑していた雲井たちもその男性の行動を不審に思ったのか、怪訝けげんそうに見つめていた。

「あの……」

もう一度香澄が声をかけると、その人は香澄をジッと見て口を開いた。

「虹林弥生さんが亡くなったと聞きました。が事実でしょうか」

男性の口から出た弥生の名前に、張り詰めていた店内の空気が和やわらいだ。

それは香澄も同様で、弥生の知り合いなのかと警戒を解く。

もしかしたら弥生の死を知って、駆けつけてくれたのかもしれない。

先程店内を見回していたのも、もしかしたら弥生が生きているのではと、自分が聞いたことが嘘だったのではないかと、そう思った故の行動だったのでないか。

そう思うと、香澄は目の前の男性への感情が変わっていくのを感じる。

「はい。祖母は四日前に……あの、もしかして生前の祖母とお知り合いましたか？」

「お知り合い……そうですね、知り合いと言えば知り合いなのかもしれません。ただ、それは俺ではなく祖父の話ですが」

「おじい、おまっ」

話についていけず首をかしげる香澄に、男性はジャケットの胸ポケットから一通の古びた封筒を取り出して見せた。

香澄は差し出された封筒をおずおずと受け取る。すると、裏に弥生の名前が書いてあることに気づいた。

「これは」

「祖父が生前の弥生さんから渡された遺言書です」

「遺言書？ おばあちゃんが？」

寝耳に水とはまさにこのことだった。

そんなものの存在を香澄は知らなかったし、それをまさか初対面の男性から手渡されるなんて思ってもみなかった。けれどそこに書かれた文字は、レジ横に貼ってあるメモの弥生の字とよく似ていて、偽物だと否定することはできなかった。

「開けてもいいですか？」

「ええ。そのために来ましたから」

男性の言葉が気になりつつも、香澄は妙に大きく鳴り響く心臓の音を感じながら封筒を開けた。

一度開けられた形跡のある封筒の中には、一枚の紙が入っていた。

それを読む香澄を見ながら、男性が話し始めた。

「申し遅れましたが、俺は黒田光くろだひかる。その遺言書に書かれた黒田優作ゆうさくの孫です。祖父に代わって、その遺言状の権利を行使しにきました」

けれど、取り出した紙に書かれた内容が衝撃的すぎて、香澄の耳には黒田と名乗る男性の声はほとんど届かなかった。

「嘘、でしょ」

「いいえ、本当です」

「なんで、こんな」

書面を見つめ呆然とする香澄に、痺れを切らした雲井が問いかけた。

「香澄ちゃん、それになんて書いてあるんや？」

「あ……」

頭が上手く働かない。そんな香澄の代わりに、黒田は淡々とした口調で言った。

「遺言者、虹林弥生は次の通り遺言する。遺言者は、自己所有のこなもん市青のり町三丁目二番地所在の建物（通称「喫茶レインボウ」）および当該建物の二階居住部
分を、黒田優作に相続させる」と書かれています」

「そんなもん本物かどうかからんやろ！ だいたいなんで弥生さんがこの店をお前

の祖父に譲ろうとすんねん」

雲井の疑問は当然だった。香澄も同じことを思っていた。

どうしてこんなものを弥生が書いたのがわからない。そしてそれについて、今まで香澄に一言も話してくれなかったのも不思議だ。

もしかしたら偽物なのかもしれない。弥生が死んだ今、遺言書が本物かどうかなんてわからないのだから。

「これ、偽物じゃないかって疑ってますね」

「そ、そうです」

まるで香澄の心を読んだかのように黒田は言う。正直に頷く香澄を、黒田はバカにしたように鼻で笑った。

「もし偽物だったら、わざわざ東京からこんなところまで来るわけがないでしょう。これは今から二十年前、あなたの祖母である虹林弥生さんが自分の意思で書いたものです」

「二十年前……」

それは香澄の両親が事故死し、弥生に引き取られたのと同じ年だった。そんなとき

に、どうして。

「あなたのご両親が事故で亡くなり、そのときに多額の借金を背負うことになった弥生さんは、この店を担保に俺の祖父から三百万円借りたそうです」

「嘘っ」

そんな話、香澄は知らなかった。けれど、もしかしたらと思うことはある。

あの事故は両親に過失のあるものだったと誰かが言っているのを聞いた。そのせいで弥生が借金を背負うことになったのだとしたら、辻褄は合う。

でもだからといって、店を担保にするなんて。

「その際に借用書とこの遺言書を作ったそうです。まあ借金は完済されたようですが、なぜかこの遺言書は祖父に手渡したままだったそうです。いったいどういう関係だったのやら……」

最後の黒田の言葉は小さくて、香澄は上手く聞き取れなかった。

けれど、香澄の頭の中は今まで知らなかったことを次々と**言**われて、**パンク**寸前だった。

「で、でも借金は返したんやったらもういいやろ。だいたいこの店を取られてしまった

ら、香澄ちゃんはどうないすればいいんや」

雲井の言葉に香澄はハツとなる。

この店の権利を黒田に渡すということは、弥生との思い出の場所を奪われるだけでなく、自分が明日から生きていく場所もなくなってしまうということだ。

そんなことにも思い当たらないぐらい、弥生と過ごしてきたこの場所を奪われることが香澄にとってはショックだった。

香澄は黒田に勢いよく頭を下げた。

「お、お願いです。この店を取り上げないでください」

「そちらの事情など知ったことはありません。まあすぐに出て行けと言っても難しいでしょうし、俺もそこまで鬼じゃありません。そうですね、二か月」

黒田は細長い指を二本立てて見せた。

「二か月……」

「ええ、二か月待ちます。二か月後に、この店を譲渡する手続きをここで行います。その日までに、荷物を持って出ていってください」

それだけ言うと呆然と立ち尽くす香澄に背を向け、黒田は店をあとにした。

閉まるドアを見つめ、香澄はその場に座り込んでしまう。

何がなんだかわけがわからない。でも、弥生だけでなく、弥生と暮らしたこの店も家が奪われてしまうのだと、それが悲しくて悔しくて仕方がなかった。

「香澄ちゃん……」

心配そうに雲井は香澄を見つめる。その声に、香澄はなんとか顔を上げた。

笑え。泣き顔を見せたら心配をかけてしまう。ただでさえ弥生が死んだことで心配させてるんだ。これ以上心配させるわけにはいかないと、香澄は無理に笑顔を作った。

「えっと、ビックリしちゃいました。遺言書って……そんな、もの」

けれど気丈に振る舞おうとすればするほど、無理矢理上げた口角は、痙攣けいれんを起こしたようにピクピクと震える。今、自分が笑えているのかそれとも泣きそうな顔をしているのかも、香澄はわからなかった。

けれど、眉をひそめる雲井の表情を見るに、上手く笑えてはいないようだった。

雲井が口を開こうとする。

『これからどうするの?』とか『大丈夫?』とかきつとそんなことを言おうとしてくれているのはわかる。でもそんな香澄が一番知りたいことで、聞かれても答えられ

るはずがなかった。

だから香澄は雲井が何かを言う前に無理矢理声を出した。

「とりあえず、一度誰かに相談してみます。その、おばあちゃんが懇意こんいにしていた弁護士の方とか」

「あ、ああ。そうやな。それがいいわ。それから商工会の会長にも聞いてみるのもええかもしれん。何か打つ手もあるかもしれんからな」

雲井の言葉に香澄は「ありがとうございます」と言うと、へらっとした笑みを浮かべた。

これは幼い頃からの香澄の癖だった。何か嫌なことがあったり困ったことがあったり辛かったりするときに、それを誤魔化すためについへらへらと笑ってしまう。

笑いたくないときは笑わなくていいのだと言ってくれた弥生はもういない。

雲井は香澄の笑みに少し安心したのか「何かあったら頼ってな」と言い残し、店をあとにした。

一人残された香澄はこれからのことを考える。この店と家を奪われるなんて考えたくもない。

できることはなんでもやろう。雲井の言っていたように商工会の会長に相談して、それから弁護士べんごしの杉下すぎしたにも連絡を入れよう。それで、それで。

「それでもダメなら、どうしたらいいんだろう」

思わず漏れた自分の声の頼りなさに、香澄の不安は大きくなる。

大人になったと思っていた。もうあの頃みたいに小さな子どもじゃないと、いざとなったら自分が弥生を支えるのだとそう思っていた。なのにこうなってみて初めて、結局弥生に守られていたのだと思ひ知らされる。

こんなときどうしたらいいのか、何一ついいアイデアが思い浮かばない。弥生ならどうしたらだろうと、香澄は途方に暮れた。

「おばあちゃん……」

鼻の奥がツンとなり、目頭が熱くなるのを感じて、香澄は慌てて顔を上げた。

泣いていたって何にもならない。それよりは今できることをやるんだ。

涙が滲にじんだ目尻を手の甲で拭くと、香澄はポケットからスマホを取り出した。

そのうち必要になるかもと入れておいた商工会の番号を、こんな形で使うことになるなんて。

発信ボタンを押すと、コール音が香澄の耳に届いた。緊張で胃の奥がしくしくと痛む。香澄は空いた手でみぞおちを押さえながら、スマホを握る手に力を込めた。

数回のコールのあと、電話が繋がる。

『はい。こちら商工会です』

「あ、あのつ……すみません。私、こなもん市のほほえみ商店街で喫茶店をやっております、虹林と申します。会長さん、いらつしやいますか……？」

『恐れ入ります。差し支えなければ、ご用件をお伺いしてもよろしいでしょうか？』

「あ、はい……」

香澄は戸惑いながらも、今日起こったことをかいつまんで話した。

亡くなったおばあちゃんの遺言書が出てきて、お店を手放さなければならぬかもしれないこと――

電話口の相手は、最後まで遮らずに話を聞いてくれた。

『……そうでしたか。それは大変でしたね』

その言葉に、張りつめていた気持ちがわずかにほぐれる。

ちゃんと聞いてもらえたというだけで、香澄の胸の奥にあった痛みがほんの少しだけ和らいだ。

『少々お待ちください』

保留音が流れる。香澄は祈るような気持ちで、スマホを握ったまま固まっていた。

もしかしたら、何か助けになる話が聞けるかもしれない。そんな小さな期待を胸に抱きながら。

やがて、保留音が途切れた。

『お待たせいたしました。ご相談の件についてですが、遺言書の内容や不動産の相続など、法的なご確認が必要かと思えます。まずは弁護士などの専門家にご相談いただくのがよろしいかと存じます』

「……そうですか……」

やっぱり、そう簡単にはいかないのだ――

『ただし、その上でお店の経営を続けられるご予定であれば、創業や経営に関するご相談を承っております。今後の運営についてお困りの際は、ぜひ改めてお声掛けください』

「あ……ありがとうございます」

事務的ではあるけれど、突き放すような印象はなかった。

今は助けてもらえなくても、いつかまた相談してもいいんだ――

そんな小さな希望が、香澄の中にひっそりと灯った。

でも、これから、どうすればいいのだろう。

「顧問弁護士……か」

常連客の中に弁護士をしている人がいる。そしてその人は弥生にも香澄にも親身になってくれていた。あの人なら、杉下ならもしかしたら。

香澄は慌ててスマートフォンとの連絡帳を開くと、杉下に向けた。

何かあったときのために、と聞いていた連絡先がこんなところで役に立つなんて思わなかった。

もし弥生が新たな遺言書を書いていたら、杉下が何か知っているかもしれない。香澄はスマホを握りしめたまま、鳴り響くコール音を、祈るような気持ちで聞き続けた。

「……もしもし？ 香澄ちゃんかい？」

「こんにちは。あの、えっと」

電話をかけて香澄は気づく。杉下に弥生のことを伝えていなかったことに。

弥生の葬儀は香澄と商店街の人たちだけで行われた。

親戚がいなかったことと、香澄がショック状態にあり、誰かに連絡してもらおうなんてことにまで頭が回っていなかったのだ。

今さらながらに、香澄は自分がしてしまった不義理を申し訳なく思った。

『香澄ちゃん？ 何か、あったん？』

杉下は香澄の声色で何かを感じ取ったのか、心配そうに尋ねる。

その声が、なぜか弥生を思い出させた。

「あ……」

その瞬間、止まっていたはずの涙が香澄の瞳から溢れ出す。

それでもかろうじて声を絞り出し、杉下に告げた。

「おばあちゃんが……死にました」

『……そうか』

あまり動揺していない、杉下の様子に香澄は違和感を覚えた。

もちろん声色から全てがわかるなんて思わない。電話の向こうで驚いている可能性だってある。けれど……

「もしかして、何か、知ってましたか？」

『……ああ』

言葉少なに杉下は返事をした。そして弥生とのことを話し始めた。

『二週間ぐらい前やったかな、弥生ちゃんから電話があつてん。詳しいことは教えてくれへんかったけれど、病院で検査したらもう長くないと言われた、とそう言うてんな』

「そんなの、私、知らない……」

『心配かけたくなかってんやろね』

いくら心配かけたくなかったとしても、それを死んでから聞かされる香澄の身にもなつてほしい。それに。

「今、遺言書の件で困つてるのに……」

『遺言書？』

「はい。黒田さんという方がおばあちゃんの遺言書を持ってきたんです。それにレイ

ンボウと二階の住居部分を全て譲ると書かれてて」

恨み言を言うつもりはなかった。けれど、それでも弥生から香澄に、一言話をしていてくれればという気持ちは拭えない。

そんな香澄に杉下は呟いた。

『だから、か。まさかあのときのあれを渡したままになつてたなんてな』

「え？」

合点がいったとはかりの杉下の言葉に、香澄は「どういうことですか？」と聞き返した。

もしかしたら杉下は何かを知っているのかもしれない。

「あの、だからかって。杉下さんは何を知ってるんですか？」

『……詳しいことは、今は言われへん。せやけど、黒田っていう男が持ってきたんは、きつと本当に弥生ちゃん書いた遺言書や』

「そんな……」

それでは、もうどうにもならないのだろうか。黒田の言う通り、香澄は二か月後に自分の家から、レインボウから追い出されてしまうのだろうか。そんなの……

『でもな、弥生ちゃんは新しい遺言書を書く言うててん』

「新しい、遺言書？」

『せや。遺言書はな、日付が新しいものの方が優先されるんや。弥生ちゃんは僕に遺言書を預けたいって言うてたんや。自分が死んだときにレインボウがきちんと香澄ちゃんの手に渡るようにしたいって、だから遺言書を書き直したいってそう言うてはったわ』

「ホントですか!? じゃあ、杉下さんの手元にあるってことですか？」

杉下の言葉に香澄は食いついた。

その遺言書があればレインボウを取られなくて済む。そう思った香澄の期待を打ち砕くように、杉下は重々しい口調で言った。

『……それがな、作り直す予定やってん』

過去形で言う杉下の言葉が引くかかる。嫌な予感がする。

香澄のスマホを握りしめる手が小さく震えた。

「それは、つまり」

『タイミングが合わなくてな。僕の手元にはないんや』

一瞬、希望を抱いただけに、杉下の言葉は香澄を奈落の底に突き落とすには十分だった。やっぱりダメなんだ、と香澄は項垂れた。結局、この店もそして家も守ることができない。

力なく腕を下ろす香澄の耳に『ただな——』と話を続ける杉下の声が聞こえた。

『香澄ちゃん聞こえてるかい？ ただ原本は作っというて僕の都合が合い次第預かると、そういう話になってたんや』

それは僅かに残る希望の光だった。

「それじゃあ、もしかしたらどこかにおばあちゃんの作った新しい遺言書があるかもしれないってことですか？」

『ああ。ただどこにあるんかは……』

「私、探します」

ほんの少しでも希望が見えたことが嬉しかった。なんとかなるかもしれない。ここを守るかもしれない。

『僕もすぐにでもそちらに向かいたいんやけど。今、クルーズ旅行中で日本に戻るんが百日後やねん。今、たまたま寄港地を観光中やったから、電話に出られたんや。僕

が行ったところで、遺言書がなければ何もできることはないんやけど、それでも申し訳ない。そもそも日本におれば、弥生ちゃんの遺言書を僕が保管できとったやろうに」

「どうやら杉下は余暇で、妻とクルーズ船ツアーに行っているようだった。

百日後では間に合わない。それに杉下が悪いわけではない。タイミンクが悪かったのだ。けれど、それで香澄は諦めたくはなかった。

「私、絶対に見つけます。おばあちゃんの遺言書」

それさえあればなんとかなるのだから。それに香澄には、弥生は絶対にとこかに遺言書を隠してあるという確信があった。

あのとき、救急車の中で一瞬意識を取り戻したときに、弥生は香澄に何かを伝えようとしていた。きつとあれが遺言書の隠し場所なのだ香澄にはそう思えたのだ。

とにかく家の中を探そう。まだ申し訳なさそうに謝る杉下に大丈夫だと伝え、香澄は電話を切った。

そんなに広い家ではない。そう時間もかかることなく見つかるだろう。

そうしたらあの黒田という男に突きつけてやるのだ。この店は今も昔も香澄と弥生

の物なのだ。



黒田がレインボウを訪れてから、一週間が経った。

香澄は二階の居住スペース、そして店舗部分も必死で探した。

それこそ弥生の夫で、香澄の祖父である睦実ちづみの遺影の中まで。それでも遺言書は見つからなかった。

絶望に打ちひしがれながらも、香澄は必死に店を開けていた。そんな香澄を心配してか、代わる代わる商店街の人たちがレインボウを訪れてくれる。

雲井たちの助言で、レインボウは週に一度の定休日とお昼休みを作ることにした。営業時間も短くすればどうか、と言われたけれど、元々、朝の十時から夕方の五時

までという、そこまで長い営業時間ではなかったのですそのままにすることにした。

弥生と二人でやっていたときならまだしも、今は香澄一人しかないのだ。

以前と同じように、毎日店を開け続けるのは現実的に無理だ。できないところは変

えていくしかないのだ。

幸い、貯金はあったので売り上げが下がったとしてもなんとかなる。

香澄はそう思っていたけれど、商店街の人たちが以前よりも顔を出しにきてくれるおかげで、ありがたいことに売り上げはそう変わることはなかった。

雲井は毎日コーヒーを飲みにくるし、商店街の古本屋でバイトをしている青崎あおさきはバイトが終わると「元気ですか?」と顔を出しにくる。

今日も「これ、お昼ご飯に」と言っ、コンビニのおにぎりを香澄に渡してくれた。そんなに心配しなくてもご飯はきちんと食べているのに、香澄はそう思いながらもみんなの優しさが嬉しかった。

「あ、澤さん。こんにちは」

青崎と入れ替わるようにしてレインボウに來たのは、金物屋を営む澤だった。

テーブル席に座る澤に、香澄は梅昆布茶を入れる。澤はいつもこれを頼むのだ。

「ん、美味い。それで? その後、遺言書は見つかったんか?」

雲井のおかげで、今では遺言書とこの店の権利を奪われそうなのが、商店街の人たちみんなに知れ渡っていた。

澤も心配そうに梅昆布茶をすすりながら香澄に尋ねてくる。

「それが、まだ見つからなくて」

「そうかい。ほんなら猫神社や」

「猫、神社?」

唐突に出てきたその言葉に香澄は首をかしげる。猫神社とはいったいなんなのだろう。不思議に思う香澄をよそに、澤は話を続ける。

「天神さんのさらに奥に、猫神社っていうのがあるんや。そこには猫宮司ねこみやじいうんがおって、どんな願いごとでも叶えてくれんねんて。たとえば、死んだ人に会うこともできるらしいで」

「死んだ人に……って、そんなことあるわけないですよ」

突拍子もない話に香澄は苦笑いを浮かべた。

オカルト染みたことは苦手だ。目に見えないものは信じていない。だいたい神様が本当にいるとしたらどうして両親を、そして弥生を助けてくれなかったのかとクレームを言いたくなる。けれど、今は正直まことにもすがりたい。助けてくれるのなら神様だって悪魔だって構わない。

澤が帰ると同時に香澄はレインボウのドアに『クロスド』の札をかけた。

ほほえみ商店街から天神さん——かつおぶし天満宮は歩いて十分ほどの場所にある。香澄は大通りをまっすぐに歩き、街道まで出たら東へ向かった。

そのまま歩き続けると、左手に大きな鳥居が見えてくる。

天神祭の時期には一帯に屋台が出て、たくさんの人で賑わうのだけれど、祭りの日もなんでもない、それも平日の昼間とくれば、辺りは閑散としていた。

正面に見えている横断歩道を渡ると、目の前には小さな祠。そして、その後ろには石段があった。

最後に天神さんへ初詣に来たのはいつのことだっただろう。小さな頃は弥生と手を繋いで来たけれど、ここ数年は弥生が階段を上るのがしんどいだろうと初詣に行くことはなかった。

一人ででも行って来たらいいと言われてはいたけれど、どうせ正月が明ければえべっさんがあるので埴輪神社まで行くのだ。それならそのときに一緒に詣でればいいと思っていた。

「……静か」

石段を一段また一段と上るたびに、静まり返っていくような気がした。

そんなことを思うぐらいいには空気が澄み、そして厳かな雰囲気か漂っていた。

久しぶりに上った石段は思った以上にしんどくて、運動不足なのか息が上がる。

なんとか上り切った頃には、薄らと額に汗をかいていた。

辺りを見回してみただけれど、香澄以外に参拝客はいないようだ。それどころか宮司さんの姿すら見えない。

とりあえず本殿に詣でてから澤の言っていた猫神社を探そう。そう思い、香澄は正面に見える本殿へと向かった。財布から小銭を取り出し賽銭箱に入れる。

「おばあちゃんの遺言書が見つかりますように。どうかお願いします」

必死に祈り、さて猫神社を探そうかと本殿に背を向けた香澄は違和感を覚えた。

今、何か動かなかった？

違和感のもとを探そうと辺りを見回す。するといつからいたのか、賽銭箱の下には真つ白な猫がいた。香澄が背負っている小型のリュックよりもさらに一回り小さめサイズのその猫は、金色の瞳で香澄を見た。

「な、何？」

突然猫と目が合ったことに驚く香澄をよそに、猫は「なあ〜」と鳴いたかと思つと歩き出す。

本殿の脇道というよりは、たまたま隙間が空いているだけのようなどころを通り抜けていく。その姿を見ていると、猫は香澄を振り返り、もう一度「なあ〜」と鳴いた。まるでついてこいともいうかのように。

「え、待って。そつちつて入つていいの？ ね、ねえ」

慌てる香澄を置いて、猫はどんどんと進んでいく。辺りを見回しても誰もいない。入つていいのかどうか聞くこともできない。

「ああっ、もう！ 怒られたらあとで謝ろう」

香澄は慌てて猫のあとを追いかけた。猫は香澄がついてきているのを確認すると、そのまま本殿の裏手へと向かつて歩いて行く。

かつおぶし天満宮へは何度も来たことがあるけれど、裏手がこんな風になっているのは初めて知つた。竹林の壁を右手に見ながら進むと『守護天神』と書かれた小さな鳥居と社があった。そして社には三匹の猫の石像が飾られていた。

その前に立ち、香澄を見つめると猫はもう一度鳴いた。

「これって、まさか、澤さんの言っていた猫神社？」

壁に貼られた紙を見ると、確かに『猫神社守護天神』と書かれていた。やはりここであつた。間違いないようだ。

だがよく見るとあちこちに蜘蛛の巣が張られ、寂れた雰囲気のところは、澤の言うように、なんでも願いを叶えてくれるというようには到底見えない。

やはり噂は噂なのだとかツカリし、そんな噂にまですがつてしまった自分が滑稽で、香澄は笑えてきた。

とはいえ、せっかく来たのだから祈るだけ祈ってみよう。そう思い、香澄は先程と同じように財布から小銭を出すと賽銭箱に入れた。

「おばあちゃんに会わせてください。お願いします、猫宮司様」

手を合わせて願いごとを唱える。けれど辺りは静かなまま、ただ風が竹を揺らし、葉の重なる音だけが聞こえていた。

「……まあ、そつだよね」

香澄は自嘲するように言うと、小さく笑つた。

最初から猫宮司なんて胡散臭いものにすぎらうとしたのが間違いだつた。帰ろう。

そしてもう一度家と店の中を探そう。

無駄な時間を過ごしてしまった。そう思い、香澄は猫神社に背を向ける。すると、香澄の目に先程の猫が映った。

猫はどこからともなく現れたカラスにつつかれている。逃げようとするのだけれどそれよりもカラスの動きが速い。というか猫が弱っているのか動きが鈍かった。

このままではあまりよろしくないことになってしまいかもしれない。

香澄は辺りを見回し、境内の掃除用だろうか、竹箒たけほうしを見つけた。それを手に取る
と猫を襲うカラスに向かって振り回した。

「こらーっ」

カラスは突然の攻撃に驚いたようで、猫から離れるとそのまま飛び立ってしまう。

香澄は慌てて猫を抱きかかえた。幸い怪我はないようだけれど、猫はぐったりとしたりたまま動こうとしない。具合でも悪いのだろうか。

「大丈夫？ え、どうしたらいいの？ 病院行く？」

慌てる香澄の耳に、微かに腹の鳴る音が聞こえた。辺りを見回してみると人影はない。もちろん香澄の腹の音でもない。ということはまさか――

「お腹、空いてるの？」

まるで返事をするかのように、猫の腹はもう一度小さく鳴った。

何か猫が食べられるような物はあっただろうか。

香澄は背負ったリュックを開けると中身を確認する。

そこにはキャンディとガム、そして店を出るときに青崎からもらったおにぎりがあった。おにぎりの具はおかかと書かれている。これならほぐしてやれば食べられるだろうか。

おにぎりをパッケージから取り出すと、香澄は恐る恐る猫の鼻先に持って行ってみる。ヒクヒクと鼻が動いたかと思うと、猫は凄い勢いでおにぎりに食いついた。

あつという間に食べ尽くすと、猫は満足そうに「なあ〜」と鳴いた。

香澄は猫の頭を撫なでると立ち上がる。さあ帰ろう。お昼休みもそろそろ終わりだ。来た道に戻ろうとする香澄の背に、ふいに誰かの声が聞こえた。

「願いがあるのだろうか」

いったいどこから誰の声がしたのかと振り返るけれど、そこには先程までおにぎりを頬張っていた猫がいるだけだった。

聞き間違いかと首をかしげる香澄の耳にもう一度声が聞こえた。

「どこを見ている」

その声は香澄の足下から聞こえた。

「……猫が？ 喋った？」

いやいや、そんなまさか。猫神社の猫宮司を探しにきたのは自分だけれど、だからといって猫が喋るなんて、理解が追いつかない。

けれどそんな香澄の戸惑いをよそに、猫は口の端におにぎりのご飯粒をつけたままぐるりと宙返りをした。何も起きない。

ほかんと見つめる香澄を無視して、猫は金色の目細め、舌打ちをした。

「ちっ。やはり無理か。おい香澄」

「え……なんで、名前……」

知っているの？ と続けようとした香澄に、猫は口の端を上げて、まるでニヤリと笑うかのような表情を作った。

「それぐらい知っている。香澄、先程の握り飯の礼にお前の願いを叶えてやろう」

あまりに横柄な態度。そしてそれ以上に、喋る猫という不審さに香澄は後ずさる。

立ち読みサンプル
はここまで

大丈夫、全力で走れば逃げられるはず。チラッと後ろを確認して、逃げ出すタイミングを窺う香澄に、猫は言った。

「私は神使。神の使いだ」

「神……使？」

聞き覚えのない言葉に、香澄は猫の前にしゃがみ込み聞き返してしまう。猫は香澄に頷くと話を続けた。

「この社に祀られるふく刀自命の神使テンテン。人間どもは私を猫宮司と呼ぶ」

「あなたが、猫宮司？ 本当に？」

猫神社の猫宮司が本物の猫だったなんて。いや、でも本物の猫は人間の言葉を喋らないからまさか化け猫？

香澄の心の声を読んだかのようにテンテンと名乗った猫は鼻を鳴らした。

「失礼なことを考えているようだが不問にしてやる。私はこの額ぐらい心が広いからな」

「猫の額って、狭くない？」

「バカが。猫ジョークだ」